

多文化間における介護実践に関する 予備的考察

二瓶 さやか 十文字学園女子大学

キーワード

多文化、多文化共生、介護実践、外国人、介護職

I 研究の背景と目的

要介護高齢者人口のさらなる増加を背景に、誰が介護を担うのが社会的課題・関心となっている。そこで、2008年に経済連携協定(EPA)に基づき介護福祉士の受け入れ政策が開始され、2016年には、「介護」が外国人技能実習制度への対象職種となった。2017年からは、訪問系介護サービスにも外国人労働者の就労範囲が拡大され、さらに、介護福祉士養成施設を卒業し資格を取得した留学生に対する在留資格が新たに創設される等、「介護」の担い手は、従来の『家庭内介護』から『移民の労働』を含めた形へと大きく変容しているのが現状である。さらに、地域共生社会の実現に向けて、地域包括ケアシステムのさらなる深化・進化が図られているが、介護実践の担い手は、グローバル化のもと国境を越え、国籍・文化・言語等が異なる住民等を包摂する多文化共生の視点のもと推進していく必要性が示されているといえる。こうした現状を背景に、歴史的にも移民国家でないわが国が、「感情労働」(A.R.ホックシールド 2000,p.7)といわれる介護の領域において外国人労働者を受け入れるには、介護の概念、実践のあり方を改めて論じる必要がある。日本人意識の変

容を図らなければ「他文化強制」の実践になりかねず、介護分野における多文化共生施策の実現は、今後の社会保障政策においても大変重要な課題であるといえる。

介護分野における外国人介護職員の受け入れについては、多くの研究者が実際の介護現場への適応について指摘しており、(田辺 2010,pp.39-40, 赤羽 2014,pp.22-24, 伊藤 2014,p.95 下野 2016,p.41)特に、言語が障壁となる「コミュニケーション」に対する課題が多く散見されている。しかしながら、外国人介護職の確保は差し迫った課題であり、受け入れが現実となっている今日、多言語・多文化を持つ外国人にも適応できる介護実践を実現するため、日本の介護概念を柔軟に変容させていく必要があると考える。

そこで、介護をする側と介護をされる側が多様な文化に属するなかで実践される介護実践を「多文化共生介護」と定義付け、わが国において多文化共生に根差した介護を実践・実現するための実践概念を理論化することを研究の最終目標として位置づけ、本研究では、外国人介護職に視座を置き、多文化共生介護の実践に向けた概念構築に向けた示唆を得ることを目的とする。

Ⅱ | 研究の方法

本研究では、第一に多文化を背景にもつ職員間における「老い」「介護」の概念について、先行研究を用いて比較を行う。第二に、介護実践でも非常に重要なキーワードとされ、外国人介護職の受け入れを背景に、これまで以上に多用化されている「文化」に着目する。「文化」という言葉が介護実践において意味する概念を整理するとともに外国人介護職に視座をおいた「文化」のあり方について概観する。さらには、多文化を包含する介護実践を実現するための観点として、ソーシャル・スキルについて着目し、実践現場における支援の方策を考察し、多文化共生介護を実現するための概念構築に向けた示唆を得て、今後の課題を展望していく。

Ⅲ－１ | 「老い」「介護」に関する 多文化比較

「老い」を捉える視点は時代や社会によって変化するものであるが、現代において哲学的な観点から「老い」に関して論じたSimoneは、「人間の老いは生物学的・経済社会的・心理的要因の複雑な相互連関によっているという意味で文化的な問題である」と述べており(Simone 1972,p.125)、「老い」に関する研究は、老年学の分野において、1960年頃より「Successful aging」=「良い老後」として取り組まれてきたが(Torres 1999,pp.35-36)、その定義については共通認識が得られていないとされている。(Willcox 2007,p.138)つまり、普遍的な生物学的過程である「老い」に対する概念は、多文化間において介護を実践するといった行為のうえで様々に解釈され、相互に影響していると考えられる。

実際に文化人類学の分野において、先の老

年学の分野で示された「良い老後」が異なる文化においてどのように捉えられているかを比較検討した研究によると、「アメリカ人は自立し、一人で生活することを『良い老後』と考えるのに対して、香港の高齢者はなぜ一人で自立して生活することが良い老後なのかが理解できず、家族が自分のニーズを満たしてくれることに最高の価値を置いている。また、アメリカ人の高齢者は楽観的で積極的に勇気があり、個人が世界とどのように関わるのかという点を重視しているのに対し、香港の高齢者は寛容で融通が利くことなど、個人が社会からどのように見られているのかを重視している」ことが報告されている(Keith 1990,pp.131-133)。そして、高齢者に対するサポートの日米比較を行った研究によると、高齢者にいつ、どのような時に、どのような介護を行うかは、文化によって異なることが報告されている(Hashimoto 1996,p.36)。

先行研究からも示唆されているとおり「老い」に付随する「介護」の概念も、背景の文化によって異なる様相をもつといえよう。

日本においては、「社会福祉士及び介護福祉士」の制定とともに介護福祉士が国家資格として位置付けられ、その後の介護保険制度の導入とともに「介護」の概念が顕在化してきたが、わが国においては、「介護」や「ケア」の概念は、立場や捉え方によって一定ではないことが言及されている(馬場 2000,p.60)。また、日本における「介護」の概念のあり方は、「法律などに規制されてあらかじめ定められていると考えるべきでなく、実践が先行して『場』を形成し、その後行政が追認するという形になっていく」との見方も示されている(小山 2001,pp.75-76)。

現在の外国人介護福祉士の政策等を背景

に、母国や日本において介護福祉士といった国家資格を取得し豊かな介護に関する知識を備えても、介護実践にともなう「老い」「介護」といった概念相違をはじめ、様々な面において日本と母国との文化差が時に困難をもたらす可能性があると考えられる。介護の実践の場において、外国人介護職が対象とするのは、全く異なる文化背景をもつ日本人が大半である。外国人介護職が日本の介護現場へ適応を目指す際には、ホスト国である日本人介護職の行動パターンから学習や関係する言語を習得していくものと考えられる。つまり、外国人介護職を受け入れる際には、広義には、わが国における「老い」「介護」といった介護観の枠組み、狭義には実践現場における介護実践のあり方について、多文化理解を念頭に改めて検討し示す必要があるといえる。

Ⅲ－２ | 介護における「文化」理解の重要性

介護は、「介護福祉援助のなかに生活文化的な配慮を取り入れることにより、その人らしい生活が継続でき生活の質の向上へとつながる」(遠藤 2007,p.46)ものと述べられているとおり、多様な世代間が相互に関係する介護実践において、日本人が、「文化」という言葉が持つ意味を正しく理解し、介護実践の場においてさらに探求していく視点が不可欠である。

近年、外国人介護職の受け入れを背景に「文化」という用語が多様に用いられるようになり、外国人介護職が日本で介護業務に従事するにあたっては、先述のとおり、「多文化」という問題に直面していると考えられる。そこで、本節では、介護実践における「文化」について概観し、外国人介護職の適応支援に向けた示唆を得ていく。

文化の定義は、「文化とは、ある集団のメ

ンバーによって幾世代にも渡って獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間・空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相の集大成」として示されている(岡部 1996,p.32)。

つまり、文化とは個々のなかで蓄積・醸成されていく観念であるといえるが、文化の異なる間柄でコミュニケーションを図る際の認識について、「人は目に見える文化(物理的文化)と目に見えない文化(観念的文化)の違いを初めて認識する。各自が有している観念的文化は無意識下に存在しているため、日常生活では当たり前のこととしてあまり重要視していないが、他の文化の違った当たり前に直面したとき、初めて自身にとって大切な文化であると認識される」(北村 2020,p.20)と述べられている。外国人介護職の介護の実践場面においては、物理的な文化差異にとどまらず、「老い」「介護」といった‘概念’に依拠する‘観念的文化’の差異も多分に感じ取っているものと考えられる。無意識化に存在するとされている‘観念的文化’という潜在的な文化への理解も、多文化を背景に持つ外国人介護職を受け入れ、適応を支援する際に重要な視点であると考ええる。

また、海外の異文化適応研究に目を向けると、「母国から離れて文化差と向き合えば様々な困難が生じ、滞在者が新環境に慣れるのに時間がかかることは、既によく知られている」(Ward, Wilson,&Fischer 2011,p.139)とされ、さらに、「異文化圏での社会生活の困難は、心理的な健康の悪化と深い関わりをもっていると考えられている」(Rogers & Ward 1993,p.190)とも報告されている。つまり、外国人介護職受け入れに際しては、‘文化差’について捉え、そこに何らかの支援策を講じる必要がある

といえる。外国人介護職が日本人介護職と協同し、対象とする利用者との関係性構築のなかで、それぞれが両者間に存在する文化差に気づく場面が生じるであろう。その際、外国人介護職はその文化差を認識することで日本において求められる介護観や知識・技術などを磨き、職業的スキルを向上させていくこととなる。この視点を日本人介護職も同様に持ち、文化が異なるなかでの対人援助のあり方について考えていくことで、多文化も包含した新たな介護実践のあり方を示す端緒となると考えられる。この考えを具現化するには、ソーシャル・スキルの観点からのアプローチに注目できることが報告されている(畠中 2015,p.107)。

ソーシャル・スキルとは、社会生活において対人関係を維持・発展させるための技能である。そして、人とのコミュニケーションにおいて必要となる言語的・非言語的スキルはすべてその対象になりうる。外国人介護職が日本という異なる文化に身を置き自身の社会生活を成立させ、さらに「介護」という対人関係のなかで異文化を背景にもつ他者の生活を支援する際には、新しい生活様式の中で日本独自の文化についても理解しなければならない。

田中(1991,p.101)は、異文化適応について、‘その社会でのソーシャル・スキルを理解し使いこなせる状態’と考え、ソーシャル・スキルの獲得、技能向上によって対処行動が向上し、問題を減少・解決・予防することから生活の質を向上させると述べ、その適応促進機能に注目している。また、畠中(2015,p.107)も外国人介護職のソーシャル・スキルの行使がケアの場面においてトラブルの予防を助け、ストレスが軽減して心理的適応を促進させ、さらに、社会的場面での文脈に即した振

る舞いによって社会文化的適応が高まり、当該社会での効果的な行動により自己実現も進むことが期待できていると述べている。

外国人介護職について、「日本人同士であれば言語化されない暗黙の前提や価値観、規範意識が共有されていないところから出発しなければならない。さらに、意味の伝達手段としての行為や感情も、異なった文脈で読みかえられることもある」(小川 2009,p.119)と述べているとおり、外国人の介護職員は、潜在的にソーシャル・スキルの概念を念頭に置きながら、介護現場の適応過程において日本人との対人関係を形成しているものとも考えられる。しかしながら、外国人介護職とソーシャル・スキルの関係性について着目した研究は十分でないことが指摘されている(畠中 2015,p.107)。

今後さらに多文化化が進むと予想される介護現場において、外国人介護職と日本人介護職が協同していくためには、介護に従事する外国人介護職の立場に立ったソーシャル・スキルを解明するとともに、実践現場においてソーシャル・スキルが促進される支援のあり方について検証していく視点も重要であると考えられる。

IV | 考察

本研究では、介護をする側と介護をされる側が多様な文化に属するなかで実践される介護実践を「多文化共生介護」と定義付け、わが国において多文化共生に根差した介護を実践・実現するための「多文化共生介護」の実践概念の理論化に向け、多文化共生介護の実践に向けた示唆を得ることを目的として研究に取り組んだ。

「古い」「介護」に関する多文化比較では、異なる文化にはそれぞれの国を背景とした異な

る概念があり、それらが介護を実践する側とされる側との関係に直接反映されることが明らかとなった。介護を受ける立場である高齢者の立場で「老い」のプロセスについて改めて考えてみると、「近代以前には『年齢』という指標よりも重要なことは、機能的な基準、つまり、その人になにができるかということであり、たとえ、働く力が減退しても補助的な労働は高齢者にとって可能であり、とりわけ、長年の経験から気候の変動を予測したり、先例に通じていることからさまざまな場面で発生する問題に助言する彼らの役割は共同体において必要な部分であった」(宮田 2000,p.68)。その意味では、「年老いた人間には、身体的な衰弱を補う知的役割が期待され、また発揮できる場があり、労働力だけでなく、知的貢献においてその存在意義が規定されていた」(新村 1997,p.55)とされている。

その一方で、介護を要する状態における「老い」は、他者への依存度が高まっていく過程でもある。この過程では、「他者のケアなしには食事、排泄、入浴などの日常生活を営むことができなくなり、他者に依存をすることで生かされている生のありようと向き合うことでもある。自己完結できない身体をもてあまし、他者に依存をすることで生きる、生かされることは、自己の中に他者を必要不可欠な存在として受け入れることでもある。」(小川 2009,p.119)。「老い」というプロセス上発生する、重要な役割概念と他者への依存といった反する老年観の中に置かれる介護を必要とする利用者にとって、多文化を背景に持つ外国人介護職との関係性はどのように影響するのか。そしてまた、異なる文化的背景のもと、外国人介護職は対象とする利用者をもどのように捉えるのか。介護(ケア)の本質が「相

手の要求を理解することでありそれに対して適切に応答すること」(メイヤロフ 1993,p.34)であることをふまえると、外国人介護職の「老い」「介護」といった概念比較のみならず、外国人介護職と介護を必要とする利用者、双方の意識レベルに視座を置いた適応に関する検証の必要性も改めて示唆された。

次に、外国人介護職が日本の介護の実践現場への適応を目指す際の観点として、「文化」について着目し、その意味する概念について整理を行った。

現在、多文化間において介護の実践が行われているのは、大半が移民社会である。移民社会においては、「政府や学校、銀行や商店など社会の全てのセクターにおいて移民の社会統合が進んでいるため、異文化間マネジメントの経験の積み重ねがある。シンガポールやオーストラリアの高齢者施設におけるマネジメントも、移民受入国としての異文化間マネジメントの蓄積の上にある」(小川2009,p.113)と述べられている。日本における外国人や外国人労働者の受け入れは、少子高齢化に伴う人手不足解消を背景に拡大傾向にあるが、諸外国に比べると歴史は浅く、外国人労働者をマネジメントする経験といった蓄積も乏しい。外国人介護職の受け入れに伴う介護の実践現場におけるマネジメントも同様の状況である。

介護分野においては、コミュニケーションによる言葉の障壁の他にも、文化・風習・宗教上の課題も指摘され、「文化・風習・宗教上の違いによって、受け入れ施設でトラブルが多発しているという報告がある」(于 2020,p.12)。本研究において、介護現場における「文化」の概念について、先行研究を中心にレビューし、介護現場で求められる「文化」理解の重要性

を改めて確認した。さらにソーシャル・スキルといった視点から異文化適応の支援策についても概観し、介護現場に従事する外国人介護職という特有の視点に立った文化差に対する適応のあり方とその支援策について今後検証を行っていくことの必要性も示唆された。

最後に、外国人介護職が生活そのものを送る「地域」に着目し、わが国における多文化共生のあり方を整理するとともに、介護施設における外国人介護職の受け入れとの関連性について考察していく。

わが国では、2006年以降、総務省により「多文化共生推進プラン」によって、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と多文化共生の定義が示され、その推進が図られているところである。ここで示された多文化共生の理念について、「外国人支援はマジョリティである日本人からマイノリティである外国人に対するパターンリズムの視点が存在していたため日本人と外国人が対等な関係を構築し、パターンリズムからの脱却を目指そうとしたものであった」。さらに、「多文化共生の実践には日本人／外国人の二分法的思考を乗り越えること、同化ではない支援のあり方を問い直す必要性」についても報告されている（塩原 2012, pp.131-133）。つまり、日本人と外国人といった対立として捉えるのではなく、相対化した関係性を構築していくことが地域において求められており、こうした支援のあり方は今後ますます重要視されるものと考ええる。

こうした地域における地域共生社会の捉え方については、介護の実践現場においても同様に捉えることができよう。多文化の介護職

員が日本における介護施設で日本人介護職と共に協同する際には、文化の違いを否定的に捉えるのではなく、他国の文化を知る視野を相互に持つ姿勢が求められる。そして、介護を実践するうえで、日本人介護職も自身の「文化」を理解し、他者との文化の相違を知る。こうした姿勢は、自国文化を見直すこととなり得て、総体的に介護の質の向上にも寄与するものと考えられる。

V | 結論および今後の課題

外国人介護職が日本における介護実践の場に適応し、共同する介護職員と共に協同しながら、質の高い介護の提供を目指すためには、受け入れ側が「介護」とは何かといった根本的な問いに立ち返り、相互理解を念頭に環境を整えていくことが必要である。介護現場におけるグローバル化は今後もさらに盛んになっていくと予想されることから、多文化介護の実践に関する方法論を検証していくことが求められる。

本稿は研究の最終目標として位置付けている、多様な文化間において実践される「多文化共生介護」のあり方の示唆を得る目的で研究に取り組んだが、全人的な視点での支援が必要とされる「介護」を「多文化」の視点で捉えるには、関連する様々な分野からの知見を得て、さらなる「介護」概念の醸成が必要であることを確認することができた。本稿を基礎研究として位置づけ、さらなる研究を発展させていく所存である。

付記

本研究は、JSPS 科研費 (JP19K13984) を受けた研究成果の一部である。

◎ 引用・参考文献

- 赤羽克子・高尾公矢・佐藤加奈(2014)「介護人材不足と外国人労働者受入れ課題」『聖徳大学研究紀要』第25号,pp.21-29.
- 朝倉輝一(2019)「老いるということ」『東洋法学』第62巻,第3号,pp.385-405.
- 伊藤真理子(2014)「外国人介護福祉士候補者等の受入れに関する諸問題」『岡山大学大学院社会文化研究科紀要』第38号,pp.95-113.
- 于洋, 2020,「わが国における外国人介護人材の受け入れ政策の展開と課題」『城西現代政策研究』13巻, 第2号,pp.1-17.
- 遠藤清江(2007)「生活文化と介護福祉援助の関係についての一考察」『京都市女子大学生活福祉学科紀要』第3号,pp.39-46.
- 岡部朗一(1996)『文化とコミュニケーション』有斐閣.
- 小川玲子(2009)「外国人介護職と異文化ケア」『九州大学アジア総合政策センター紀要』3,pp.113-126.
- 小山隆(2001)『介護福祉 -介護福祉の活動の場-』有斐閣.
- 黒田文(2005)「高齢社会における『老い』の理解にむけて」『社会福祉学』第46巻, 第2号,pp.78-87.
- 北村伊都子(2020)「笑顔の印象形成に影響を及ぼす背景」『梅花女子大学』第16号,pp.20-29.
- 塩原良和(2012)『現代社会学ライブラリー3 共に生きる-多民族・多文化社会における対話』弘文堂.
- シモース・ド・ボーヴォワール(朝吹三吉訳),(1972)『老い(下)』人文書院.
- 下野恵子(2016)「EPAにより外国人看護師・介護福祉士の受入れ政策の問題点」『中央大学経済研究所年報』第48号,pp.41-68.
- 田中共子(1991)「在日留学生の文化的適応とスキル」『異文化間教育』5,pp.98-110.
- 田中共子(1991)「異文化におけるコミュニケーション能力と適応」『広島大学留学生日本語教育』3号,pp.19-31.
- 田辺毅彦・杉岡直人・岡田直人ほか(2010)「高齢者介護における異文化コミュニケーション問題」『北星学園大学文学部北星論集』第48巻, 第1号,pp.33-43.
- 中川かず子・神谷順子(2018)「北海道におけるベトナム人技能実習生の日本語学習意識と学習環境」『開発論集』第102号,pp.79-98.
- 新村拓(1997)『老いと看取りの社会史』法政大学出版.
- 畠中香織・田中共子(2015)「在日外国人ケア労働者における異文化間ソーシャル・スキルの異文化適応への影響」『多文化関係学』第12号,pp.105-116.
- 馬場順子(2000)『「ケア」「ケアする行為」とは何か』『人間福祉研究』第3号,p.60.
- 堀江直美(2020)「在日ベトナム系移民に関する予備的考察」『多文化社会研究』6,pp.103-120.
- 宮田登(2000)『老人と子供の民族学』白水社.
- ミルトン・メイヤーロフ(1993)『ケアの本質』ゆみる出版.
- A.R, ホックシールド(2000)『管理される心』世界思想社.
- Hashimoto, Akiko (1996)『The Gift of Generations: Japanese and American Perspectives on Aging and Social Contract』Cambridge University press.
- Keith, J., Fry, C. (1990)『Community as context for successful aging』Berging and Garvey.
- Rogers, J., Ward, C. (1993)「Expectation-experience discrepancies and psychological adjustment during cross-cultural Reentry」『International Journal of Intercultural Relations』17,pp. 185-196.
- Torres, Sanada. (1999)「A Culturally-Relevant Theoretical Framework for the Study of Successful Ageing」『Ageing and Society』Vol.19,pp.33-51.
- Ward, C., Wilson, J., Fischer, R. (2011)「Assessing the predictive validity of cultural intelligence over time」『Personality and Individual Differences』51,pp.138-142.
- Willcox, Craig (2007)「The Cultural Context of Successful Aging Among Older Women Weavers in a Northern Okinawan Village」『Cross Cultural Gerontology』Vol.22,pp.137-165.